

「渡来入と在来人
～最近の人骨・DNAの研究成果より」を聴いて

聴講日：R1.6.1
むきばんだやよい塾第20期

日本人の二重構造モデル

埴原氏によると、旧石器時代人は、東南アジアに棲んでいた古いタイプのアジア人集団をルーツに持っていて、それに続く縄文人は日本列島の温暖な気候に育まれて独特な文化を熟成させ、混血など他の集団の影響を受けず、純粋な集団として小進化をしたと言われています。一方、地球が冷涼化するにつれて北東アジアの集団が南下し、日本にも渡来して来ました。この渡来は弥生時代になって急に増加し、以後7世紀まで続いたと考えられています。日本人集団の主な構成要素を縄文系と渡来系の二つと考えることから「二重構造モデル」と呼ばれています。

各時代出土人骨の特徴

各時代の出土人骨には以下のような特徴があります。① 旧石器時代：試料は多くなく、沖縄県に集中している。② 縄文時代：鼻が高く彫りが深く、体毛が濃い。③ 弥生時代：鼻は低く、歯は縄文人より大きい。体毛が薄く彫りが浅い。現在人の統計分析から眉毛、耳、瞼の形状が推定されている。④ 古墳時代：出土人骨は身分の高い階層に偏り、身長が高くなる。⑤ 鎌倉時代：顔全体が細くなり、額から後頭部までの長さが最長になる。⑥ 現代人：小顔になるが、口元締りが緩くなる。

徐福伝説と稲作伝来

司馬遷の『史記』巻百十八「淮南衡山列伝」には、秦の始皇帝に「東方の三神山に長生不老(不老不死)の霊薬がある」と伝え、始皇帝の命を受け、3,000人の若い男女、多くの技術者集団を従え、五穀の種を持って東方に船出する、という記述があります。徐福伝説と呼ばれるものです。徐福は、「平原広沢(へいげんこうたく/広い平野と湿地)」を得て、王となり戻らなかった、と記されています。日本各地にはこの徐福伝説が伝えられていますが、弥生時代の稲作伝来と関係しているかもしれません。

下顎大臼歯と民族性

ヒトの下顎大臼歯は、ほぼ四角に並んだ4個の咬頭(咬合面の突出部)と、その後方の咬頭と合せて5個の咬頭をもつものが基本的ですが、人に寄っては過剰の咬頭が現れる場合があります。このような過剰の咬頭は歯冠の発達がよいことを示しており、その発生頻度から地域性や民族性を知る手がかりとなります。日本人が大陸から渡来したことを推定する要素の一つです。

人骨に残る疾病の痕跡

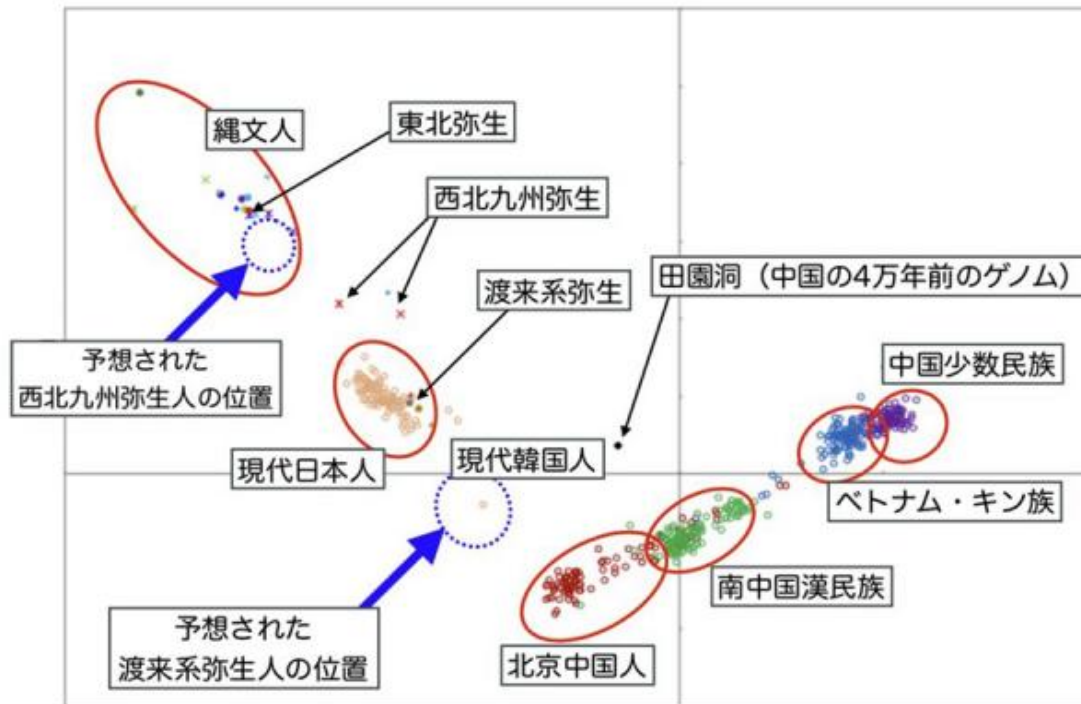
弥生時代には結核や受傷痕、戦闘外傷が増え、鎌倉時代にはハンセン氏病が元寇によって持ち込まれたと思われます。結核を患った人骨が青谷上寺地からは出土していて、日本最古の記録です。韓国南部の靑島遺跡(BC100～AD1年)で、2006年に出土した若い女性のほぼ完全な人骨の脊椎3カ所にもカリエスが見つかり、周辺の骨にも炎症の跡がありました。中国湖南省で1972年に発見された前漢時代の「馬王堆」漢墓は、その良好な保存状態で世界を驚かせましたが、1号墳(BC168年)から見つかった高貴な身分の女性のミイラに、結核の病変があることが分かっています。また、1958年の発見以来、段階的に発掘作業が進められてきた上海市松江区の広富林文化遺跡では、整理していた成年女性1個体の脊柱に異常な後弯が認められ、胸椎と腰椎に空洞部と圧迫骨折が見られることから脊椎カリエスと診断されました。現在、東アジアで最も古い結核の症例です。

青谷上寺地の出土人骨

青谷上寺地遺跡から多くの人骨が出土しています。男性人骨が多いですが、太くて頑強な男性の方が遣り易いので、当時の人口比を示しているわけではありません。背面をかなり鋭利な刃物で上から下へ切りつけられている人骨があり、当時の住人が周辺と友好的か非友好的か議論を呼んでいます。国内で初めて弥生時代の脳が出土していますが、DNAは分解してしまっているので研究する対象にはなっていません。青谷上寺地遺跡の最新のDNA分析では、在来系である縄文時代人の特徴的なハプロタイプであるM7aやN9bがほとんど認められず、渡来系に多い特徴のハプロタイプばかりが認められました。出土人骨は大陸からきた人か、或いは二世・三世の人たちであることを示しているのではないのでしょうか。

人骨のDNA分析

国立科学博物館ではヒトのDNAに含まれる1塩基の違いに関する情報をもとに、主成分分析という統計方法でアジアにおける人類集団の類似性を図式化しています。図の中の位置が近ければ、それらの集団は互いによく似ていることを意味し、人類集団を調べる上では、標準的に用いられています。中国やベトナムなど大陸のアジア人集団から少し離れたところに現代の日本人が位置しています。そして複数の古人骨からデータが集められてきた縄文人は、さらに離れた位置にあります。縄文人は現代のアジア人と比較すると、遺伝的にかなり特異な存在だったことが分かります。縄文人と弥生人の混血によって現代日本人が形成されたという考えに従って、当初は渡来系弥生人は大陸系の人々と日本人との間に来るものと予想されました。しかし結果は現代日本人と重なる位置にプロットされました。従来の二重構造モデルを再検討する必要があるかも知れません。



韓国禮安里古墳の総数183基の墳墓から約200体の人骨が出土しています。金官伽耶及びその後の金海地域の庶民階層の集団墓地と考えられています。勒島遺跡、大成洞古墳、禮安里古墳からゆり椅子状下顎骨が多く見つかり、伽耶地域或いは金官伽耶地域の特徴なのかも知れません。また、伽耶地域の人骨は歯根部が非常に短い特徴を持っており、韓国国内および近隣地域にはその特徴は認められません。人類が北東アジアでどのように移動していったのかを明らかにする手がかりになるのではないかと思います。